

限りある今を

桜道中学校 三年 星 里音

書名 「その日の前に」

著者 「重松 清」

この本を読もうと思つたきつかけは祖父だ。

祖父は難病で、肺がもう動かず、酸素濃縮装置をつけて何とか生活している。お盆休みに会つたとき、元気だつた頃の姿と酸素濃縮装置をつけた姿の違いに私は戸惑つてしまつた。気丈だつた祖父が吐いた弱音に祖母は悲しそうな顔をしていた。祖父のいなないところで祖母は涙を流していた。

私は祖父と祖母にどんな言葉をかければ良いのかわからなかつた。自分の無力さを痛感した。自分にできることは何なのか、ずっと思考を巡らせていた。そんな時にこの本と出会つたのだ。

この本は短編小説集で、七編の話が収められている。最後の三話は一つの家族の物語として繋がつてゐる。この物語は、がんで亡くなる妻とその夫・二人の息子を中心にそれぞれの人物視点で「死」や「別

れ」に向き合う姿が描かれている。

しかし、全ての話に共通していることは、「その日＝大切な人との別れの日」が迫る中で、人はどのように生き、どのように「その日」に向き合うか、ということだと思う。

特に心に残っているのは、夫が妻の病を知り、余命宣告を受けた場面だ。突然の知らせに戸惑いながらも、何とか明るくふるまおうとする夫。その姿から、本当は辛いけれど辛さは決して見せないという愛が伝わってきてとても切なかつた。また、妻の、自分自身が「逝つてしまふ側」であり、家族と離れてしまう寂しさや、残される家族のことを気にかける優しさが伝わってきた。

特に、この言葉に感銘を受けた。「日常というのは強いものだと、妻が病気になつてから知つた。毎日の暮らしというのは、悲しさや悔しさを通り越して、呆れてしまうほどのものなのだ。」この言葉は、夫が自分自身に語りかけている場面でのものだ。余命宣告を受けて改めて実感した「日常の強さ」や「当

たり前のありがたさ」について考えさせると共に「その前の日々を大事に生きろ」と示唆していた。人はいつか必ず死を迎える。家族、友人、そして自分自身も死を避けることはできない。でも、「その日」が来るまでをどう過ごすかは自分次第で変えることができる。そこが大事なのだと思う。

自分にとつて大切な人が、だんだんと弱っていく姿と向き合っていくこと、それはとても辛く悲しいことだ。ただ、そのことを「辛い」「悲しい」で済ませてしまつてはいけない。大切な人と今まで過ごした時間は自分にとつてかけがえのない宝物になつているはずである。そうであれば、その宝物に感謝し、その不安が少しでも楽になるように寄り添つてあげなければいけない。

大切な人との「その日」は前触れなく突然訪れることもある。その時、私はきつと激しい後悔を感じるのだろう。もつと優しく接すれば良かつた。一言でも感謝を伝えておけば良かつた。その人との時間をもつと大切にすれば良かつた。

もし、母に「その日」が訪れたら、私は何を思うのだろう。私は母に反抗的な態度をとることがある。忙しい中でも自分に目を向けてくれるのに、適当な返事をしてしまう。でも、母と過ごす日々は限られたものなのかもしれない。「その日」は突然訪れる。母と過ごしている何気ない毎日が実はとてもかけがえのないものだと気づかされた。

そして、いつかは自分にも「その日」が訪れるのだろう。その事実を受け入れたとき、これまでの人生で、自分に関わってくれた人達に対する感謝の気持ちを持つことができれば良いのではないかと思う。

命が絶える瞬間、人の脳裏にはこれまでの人生が走馬灯のように駆けめぐると聞いたことがある。私の脳裏を駆けめぐるものは、恨み辛みではなく、幸せな気持ちでありたい。

そのためには、周囲に対して、自分がするべきことを果たしたという気持ちを持つことが必要だろう。だから毎日を精一杯生き、人との関わりを大事

にしなければならないのではないか。

この本は「死」を正面から問題にしている。「死」をただ悲しいものとするのではなく、「生」と向き合うものとして積極的に捉えているのではないかと感じた。なぜなら、この本には悲しみだけでなく、一つ一つの言葉の奥に「あなたを思っている」という一貫した優しさがあり、また、大切な人がいなくなつても、世界は美しく続していくのだという希望に溢れていたからだ。読んだ後も、心が温かくなり、自分の大切な人達の顔を思い浮かべたくなる、そんな一冊だった。

「その日」は、誰の人生にも必ずやつてくる。けれど、私たちはそれを忘がちだ。

でも、これから私はこの本で学んだ「その日より前を大切に生きる」という考え方と、周りへの感謝を忘れずに、一瞬一瞬を大切に日々、生きていく。

(原文ママ)